

平成 25 年度 定年退職教員送別懇談会

2014 年（平成 26）3 月 18 日（火）

東工大蔵前会館 くらまえホール



三島良直 学長

2014 年 3 月 18 日（火）に“くらまえホール”で定年退職教員送別懇談会が開かれ、懇談に先立ち、学長の挨拶、記念品贈呈、定年退職教員の挨拶がありました。司会は、鈴木暁男 送別懇談会 発起人が務めました。退職予定の 30 名のうち、17 名の先生方にご出席いただき、お一人約 3 分で思いを語っていただきました。概要を以下に記します。

文責：博物館 資史料館部門 広瀬茂久
写真：総務部 広報・社会連携課

昔は講堂で全学教授会を開き挨拶してもらっていた。最近は少しこじんまりした形になっているが、先生方の労に報いる気持ちに変わりはない。今年は 30 名の先生方が定年をお迎えになられるが、先ずは、これまで教育研究のみならず、学内の要職もこなして頂き、さらには学外でも東工大のプレセンスを高める活動を精力的に展開して頂いたことに感謝したい。今後の大学運営に生かしたいので、先生方の思いの程をお聞かせいただきたい。



岡本清美（物性物理学専攻）

大学紛争まっただ中の1969年に入学した。入学式はなかった。それ以来、45年間（途中約3年間を除いて）東工大で世話になった。素晴らしい環境・設備・人に恵まれ、これ以上望むことはないと言っていい程の現役生活を送ることができ感謝している。4月から私立大学で非常勤講師として教育に携わり、また研究も継続してゆく所存である。東工大で学んだことをこれからも生かしていきたい。母校の発展を祈る。



渡辺順次（有機・高分子物質専攻）

思い返せば、18歳で東工大に入学して以来、47年間（1年間ポスドクで米国に滞在した以外は）本学で過ごしてきたので、大岡山は第二の故郷だ。研究室に所属してから今日まで、本館2階の右奥10メートル四方を動いていないので、狭小な人生だったともいえるが、研究・教育生活は実に楽しかったし、かつ充実していた。思い残すことは何もないが、10年間のプロジェクト「戦略的イノベーション創出推進プログラム（S-イノベ）」があと5年残っているため、石川台地区のベンチャービジネスラボに移って、研究を継続していく予定だ。私にとっては、“異端への寛容”という校風を有する東工大は夢の大学であったし、また思いのままの研究を成し遂げることができたのもこの寛容のおかげであると信じている。これからも唯一無二の校風を守っていついていただきたいと願うものである。



鈴木正昭（化学工学専攻）

2年間の米国滞在はあったが、入学して今日まで46年間、ほとんど毎日大岡山に来ていたことになる。20年近くを原子炉研で過ごし、その後理工学研究科（工学系）に移った。良い環境で好きなことをさせて貰ったことに感謝している。長くいると言いたいことも山ほど溜まってくるが、ここではそれらには触れないことにして、一つだけいいニュースをお伝えしたい。本来の教育研究以外に大田区との連携などの社会貢献などいろんなことをした。その中の一つに生徒数の減少に悩む清水窪小学校の活性化プロジェクトがある。7年目になるが、昨年度から東京都による指定を受けて、“おおたサイエンススクール”がスタートした。東工大との連携のもとに、積極的に科学やものづくりなどの理科に関連する内容の授業を行っている。1学年1クラス（20～30名）しかなかったのが、この取組みによって1学年60人に増えた；東工大の力は凄いと実感させられとても嬉しかった。小さい子供たちを東工大の力で育てる、そして、その中から将来の東工大を支える人材が出てくるのではないかと思うと期待に胸が膨らむ。定年後しばらくは非常勤の形で本学の役に立ちたい。



黒田千秋（化学工学専攻）

入学から45年にわたる東工大での勉学と研究・教育の生活を終えることになった。緑が丘地区（学生時代）、大岡山地区、すずかけ台地区、石川台地区、そして大岡山地区と、居場所を転々と変えて様々な経験を積んだ。多種多様な見聞と記憶が繋がって、心身ともに複雑というのが現状だが、定年退職を迎えることは無駄な記憶を捨て、煩惱を振り払って知識知恵を整理し、進化と単純化を進める最良の機会になると期待している。厳しくも暖かく指導して頂いた先生方、またくじけかけた心を癒して励ましてくれた先輩方、切磋琢磨してきた素晴らしい同僚の方々、信頼できる優秀な後輩の方々、そして研究室の原動力である若い学生諸君、さらに有能な事務職員の方々からの多大な力を拝借して学内外で化学工学に関わる様々な研究教育活動を繰り広げ、無事に定年退職の日を迎えられることを思うと心より感謝の一念につきる。入学当初は大学紛争の真っ最中で、田町地区での入学式や夏休みの授業を経験したので本学の全キャンパス・地区を巡ったことになった。大学運営関係の仕事では、評価室室長補佐として法人化後の本学の中期目標・計画の立案・遂行・評価に携わり変革改革のリスクを知るという貴重な経験をした。その後、国際交流センター教授として、東南アジア諸国との教育研究事業の推進に関する調整を行ったが、国際協力の難しさを痛感したことも国際化のために良い経験となった。現在、東工大は教育改革という差し迫った大変革の嵐の中にあるが、リスクを恐れずに将来のよき姿に期待し、改革のチャンスに出会ったことに感謝し、前向きに取り組んで、本学のますますの発展につなげて欲しい。4月からは、私大の非常勤講師の傍ら、本学でテニュアトラック関係の手伝いをさせてもらうことになっている。



戸倉 和（機械物理工学専攻）

本学には 46 年間 世話になった。定年に際し、数年前から気になり始めていることを述べさせていただく。最初の講義で「授業中は、お茶のようなものはいいが固形物（パン、おにぎり）は NG；寝ててもいいが私語は遠慮せよ」と言うようにしている。それを言っておかないと、時々おにぎりを食べ始める学生がいる。悪気があってそうするのではなく、先生に敵対しようと思っているわけでもなく、当たり前前と思っているに過ぎない。昔はどうだったかという、私もよく後ろの方で新聞を読んでいた。先生がこちらを見そうになったら先生の話聞く、あるいはいい話になったら集中して聞くという感性はあった。最近の学生さんは、そこら辺の感性というか物差しが少しずれているか、なくしてしまっているのではないかと心配だ。昨今、学内の若い学生だけではなく、世の中で物差しが崩れてしまっている「やってはいけないこと」と「いいこと」の境目が見えなくなっているような出来事をたくさん見るようになってきた。みんな退化しつつあるのではと心配になるが、本学の場合は感性や物差しが崩れ始めているとは思えないので、入学したての学生に当たり前のことを教えさえすれば大丈夫だと思う（ほっておくと物差しは劣化する）。教職員の方々には、世の中に流されず、物差しを大切に引き継いでいって欲しいと願う。私の時代は、そういう意味では、学生にも世の中にも物差しが整っており、いい経験をさせて貰った。これからますます東工大が発展して立派な大学になって欲しいと願う。



有坂文雄（分子生命科学専攻）

1974 年に東大の修士を終えて、考えるところあって米国に渡りオレゴン州立大で PhD，スイスのバーゼル大で 3 年近くポスドク，北大薬学部で助手として 10 年，そして 1990 年に東工大に呼んでもらった。それから 23 年も経ったというのは、にわかに信じがたい思いだ。学内でも転々とした。最初は生命理学科で，1998 年の大学院重点化で生命情報専攻に，2003 年には生物プロセス専攻に移り（ここで初めて工学系を経験して戸惑ったが，視野が広がった），そして 3 年前に分子生命科学専攻に戻り，定年を迎えることになった。国内外での共同研究が多かったが，学内でも学部を越えて共同研究できたのは有意義だった。ここ 10 年ぐらいは，音楽サークル「プラタナス」のメンバーとして，ほぼ皆勤した。すずかけ祭や工大祭を学生と一緒に盛りにすることができたのではないと思う。4 月からは日本大学の生物資源科学部（藤沢キャンパス）の非常勤講師を続ける形で日大に居候させてもらう予定だ（超遠心機によるタンパク質相互作用の解析を続けるため）。会社の学術コンサルタントにもなって専門を生かしつつ社会貢献することも考えている。



本川達雄（生体システム専攻）

23年前に一般教育等生物学担当として着任した。当時は理学部の化学科の下に組み込まれており、「一般教育は一段下で、生物はその中でも下ゆえ“人権”がないと思ったほうが無難でしょう」といわれたが、まさにそのとおりで、大綱化の時に、チャンスとばかり、逃げ出したが、生命理工でも一部の先生にはあまり歓迎されなかった（分子生物学の看板を掲げていないと一人前とみなさないという了見の狭い教授もいて苦労した）。こんな話を真に受けると、東工大には学問の自由がないことになるので、そこはジツとこらえて、本来の“生物学”を守るべく、延々としぶとく粘ってきた。しかし、一歩外に出ると東工大教授という地位はありがたかった。外で思いっきり羽を広げさせていただいた（注：時間の生物学や歌う生物学でTVや講演など引っ張りだこだった）。最後に、一般教育をいじめないようにお願いしたい。一般教育のための組織は、学長の下に直属として独立性を保ち、多様性を認めるべきだ。お前のような学問（一般教育）はいらないという荒っぽい話が出るようでは世界に冠たる大学にはなれないだろう。いろいろ不満を云いながらも、23年間もの長い間、ずっといたということは、実は、住み心地がよかったということで、感謝したい。



濱口幸久（生物プロセス専攻）

一般教育「生物学」の助手として着任して以来、41年になる。理学部にいた期間の方が長く、生命理工学部が発足して何年かしてようやく生命理工に移った。しかし、場所はずっと大岡山でやってきた。幸い、大岡山でも研究材料（ウニ）を飼育できるようにしてもらっているのは有り難い。ウニは季節もので、産卵の季節になると採取に出かけるが、特に大潮の時を狙って出かけると、海からサンプルを持って帰るのが夜遅くなる。そうすると昔は正門が閉まっていて、入れないこともしばしばだった。最近は24時間対応で、少しやりやすくなったと思ったら、定年というめぐり合わせで、「少年老い易く学成り難し」ではないが、少し複雑な心境だ。



羽鳥好律（物理情報システム専攻）

10年ほど前に企業からきて、すずかけ台を舞台に仕事をした。学生に恵まれ、皆よくやってくれたので密度の濃い教員生活を送ることができ感謝している。先発完投ではないが、ショートトリーフにしてはちょっと長めという感じで、まあ中継ぎ役を果たせたのではないかと思う（かっこよくいうとセットアッパー）。この試合には勝ってもらわなければならないので、引き継いでくれる人にはそのつもりで頑張りたい。博士の学生の進路が狭いのは、日本の将来を考えると大問題だ。大学院の博士課程学生のキャリアの事はもう少し考える必要がある。私の経験を生かしてお手伝いできれば嬉しい。論文があといくつか書けるのに、このままりタイアして書かないと、死んでも死にきれない。残った論文(研究)の仕上げは、どこかよその大学で実現したい。



早坂眞理（人間行動システム専攻）

名前から皆さんの期待を裏切ってしまったかも知れませんが、ご覧の通り男性です。「まこと」と読みます。学生のころから世界を転々としたあと茨城大学に13年勤め、社会理工学研究科の立ち上げのときに呼んでもらいました。本学の一般教育担当だった川島至先生は、私の高校時代の国語の先生で、お会いしたかったのですが、着任したときは退官されておりました。東工大は、人社系に著名な先生方がおられることで有名だったので、招かれたときは光栄に思いました。着任早々、工学部評議員の福長先生から「これからは情報の時代ですよ」といわれ、さすが東工大は先端的な大学だと感心するとともに身が引き締まる思いがしました。海外に出て感じるのですが、海外の人たちは東工大をよく知っていて大きな励みになりました。18年間 東工大でお世話になり、得難い経験をさせて貰ったことを感謝しております。東工大の今後の発展をお祈りします。



今田高俊（価値システム専攻）

最初は分子生物学を目指して東大の理科2類へ入ったが、大学紛争で、「生き物」を考えるよりは「人間」を考える方が先だろうと思って社会学科へ進んだ。助手をしばらくした後、30歳直前に東工大へ来た。天国だと感じた。当時の東大の助手はスタッフの先生方7名の研究費のやり繰りをすべて任された上に、大学院生の面倒まで見なければならなかった。フラフラ状態だった。それに比べると東工大では自分の時間がたっぷりあった。35年いた。前半が一般教育（人社系）、残りの半分が社会理工学研究科で学生との付き合いも増えた。今、本学では教育改革が真剣に進められている。これに関連して、リベラルアーツ（基礎教養的科目）について一言述べたい。リベラルアーツは中世にできた「人が身に付ける必要がある基本的な素養（知識・学問）で7科から成っていた：文法学・修辞学・論理学の3学及び算術・幾何・天文学・音楽の4科。もともと理系と文系が一緒になった教育がリベラルアーツの本質だったが、不幸なことに、教養教育は人文社会系のことだと思い込んでいる教員が少なくない。この誤解を解き、本来の教育改革になるように期待したい。



村木正昭（経営工学専攻）

私は東工大とは良縁で結ばれていたと思っている。入学したのは定員が増えた時であり、これが縁の始まりであった。入学してしばらくしての大学紛争、就職後のオイルショック、バブルがはじけ、そして大学院重点化などと、激流にもまれたが周りに助けられて何とか乗り切ってこられた。40年以上大岡山に通い続けたが、居室は北棟—中棟—南棟—北棟—石川台—西9号館と転々とした。大学を去るにあたり部屋を片付けていると、いろいろと思い出のあるものが出てきて、感慨にふけりながらの作業となっている。本学は建物も大学院生も増えて順調に発展していると思われるが、一つ気になるのは「余裕」がなくなりつつあることだ。大学のパフォーマンスには教職員の満足度も大きな要因だ。これが高くなると成長は長続きできない。是非「余裕」を取り戻してほしい。優れた先輩・先生方・同僚・学生に恵まれたことを感謝しつつ、東工大のますますの発展を祈念する。



藁谷敏晴（経営工学専攻）

1984年に徳島大に就職し、5.7年居た；そのうちの1年はスイスで、1年は東工大に来て研究をした。そんな関係もあって、1987年に東工大へ呼んでもらったが、非常にラッキーだったと思っている。来てしばらくすると、旧人社系図書室で気楽な勉強会が始まった。そこで吉田夏彦（論理学）・前原昭二（数学）・道家達将（科学史）らと議論できてよかった。数学の前原先生には、数学基礎論を教えてもらい、大きな刺激を受けた。このように「自由な空間」（旧人社系図書室）があって、何の隔てもなく話をすることが出来たのは幸せだった。これが学問にとって本質的に重要だと思うので、今後そういう空間をたくさん設けて欲しいと切に願う。学内的には何も貢献しなかった。科学史の山崎正勝先生との会話を思い出す：「きみは何かの委員になることは絶対はない」、「どうして？」、「だいたい君の名前が読めない、仮にワラガイと読めたとしても書けない」、「ひらかなで書けば？」、「そんなことは大学教授としてのプライドが許さない」。実際、学内委員はほとんどせずにすんだ。5年ぐらい前に（60歳になった頃に）突然体調を崩した。検査入院までしたが、診断の結果は過労で、事なきを得た。これから先はまだ長いので少し気楽にいこうと思っている。今後は、“ある大学”の研究所で“ある研究”をすることと、パリ大学からの依頼で10～12世紀にかけてのアラビアの論理について調査研究をすることになっている。そのために、今、アラビア語を徹底して勉強中だ（注：藁谷さんは多言語を操ることでも有名）。



岩本正和（資源化学研究所 有機資源部門）

これまでに大学を4つ（長崎、宮崎、北海道、本学）経験し、教授を27年間務めた。自由にテーマを決めて好きな研究に没頭できるという意味では、東工大が一番そういう雰囲気恵まれ、適していた気がする。それを伸ばして行って欲しい。イノベーションを達成するためには失敗を許すことが大事だ。東工大にはその環境が整っている。この大切な環境も守って欲しい。4月からは、中央大学教授として研究を続ける。



齊藤正樹（原子炉工学研究所 システム・安全工学部門）

このような催しをしていただき有難い。演壇にはきれいな花を飾り、先ほど貰った記念品も思いのほか重く大変ありがたい。1992年に阪大から移ってきて、22年間世話になった。学生たちを育てながら自分も育った。大学院の教育改革プログラムをいくつか担当し、全寮制の道場を作って、学生と一緒に寝食をともにしている。体力では学生に少し劣るが、総合力では優位に立っている。最近では、そこに住み込んでいるような状態で、先日の最終講義には家族も来てくれたが、挨拶は「久しぶりです」というような状況だ。最近感じていることを、少し生意気かも知れないが言わせていただければ、教育改革の一番大切なことは「教員の意識改革」ではないかということだ。



中村正道（大学マネジメントセンター）

保健体育の教員として、1976年（昭和51）に赴任した。採用面接の第一問目は「君はスキーができるかね？」だった。もちろん、「はい」と答えた。本学のスキー教室（単位付き）の歴史は長く、1953年（昭和28）から続いている。今年も私の生まれ故郷である北海道 名寄市（なよろし、北緯44度）で、相当寒い中で実施した。教員生活で印象深いことは、1976年（昭和51）に、授業にテニスを取り入れたことだ。それまでは軟式テニスだけだった。最近ではOB（80歳近い名誉教授の先生）が出てきて、学生と一緒にテニスをするという理想的なテニス環境が作れている。人はポストを与えないと力を発揮できない；ポストに付いても、健康に恵まれ体力がないといい仕事はできない。知力と体力をミックスして人間を評価して欲しい。37年5ヶ月間、世話になった。感謝の念が込み上げてくる。



長谷川紀子（大学マネジメントセンター）

大学マネジメントセンター所属といっても分りにくいかもしれない。総合安全管理センターで「環境」と「安全」を担当させて頂いた。高い席からの挨拶は恐れ多いが、先生方お一人お一人、職員の方々一人ひとりのご協力で成り立ってきた仕事なので、一言お礼を申し上げたく、この会に出席させて頂いた。石川町に自宅があるので、遊びに行くにも、買い物に行くにも東工大の中を通るという状況なので、ヨボヨボになってもそこら辺をふらふらと歩き回っているだろうから、見かけたら是非声をかけていただきたい。救急車や消防の音で目覚めさせないで欲しいと申し上げて、お礼とお願いの言葉としたい。